

学校におけるペットボトルキャップ回収活動に関する実践事例調査

10525 橋本 直樹
指導教員 市川智史教授

1. はじめに

今日、多くの学校が、廃棄物の分別・資源回収といったリサイクル活動に取り組んでいる。その中に、ペットボトルのキャップ部分だけを回収している学校が見られる。本研究では、滋賀県内でペットボトルキャップの回収活動を行っている小・中学校において、回収活動がどのように位置づけられ、どのように実践されているかについて調査する。

2. 方法

調査方法は、質問項目に基づく担当教員への聞き取り調査である。ペットボトルキャップを集めてワクチンに変え途上国へ送るという「エコキャップ運動」に参加している学校として日吉台小学校、北大路中学校を調査対象とした。「エコキャップ運動」ではなく、福祉施設に送っている学校として野洲小学校、五個荘中学校を調査対象とした。質問項目は、キャップ回収活動の学校における位置づけ、キャップ回収活動の取り組み方法・活動実績・課題、キャップ回収活動に対する学校（教員）のとらえ方の3点に大きく分け、実態が把握できるように詳細な20項目を設定した。

【調査項目】

学校における位置づけ	活動開始年	活動のきっかけ	活動目的	実施期間	実施組織
取り組み方法、活動実績、課題等	実施組織の活動内容		回収方法・頻度	回収箱	
	ペットボトル本体の取り扱い		引き渡し先	引き渡し前の作業	
	保護者、地域、教員の関わり		他校との連携	活動実績	
	実績の公表	活動の問題点	今後の課題	今後の計画	
学校(教員)のとらえ方	児童・生徒の変化		教師の評価		

3. 結果・考察

エコキャップ運動に取り組んでいる2校はワクチンにかえ世界中の人の助けになることを目的としておりボランティア意識で取り組んでいた。また、福祉施設に送っている2校も福祉支援やワクチンにかわり世界中の人の助けになることを目的としておりボランティア意識で取り組んでいた。

活動は主に委員会で取り組んでおり、取り組んでいる委員会は環境委員会ではなくボランティア関係の委員会であることがわかった。このことからキャップ回収活動は環境保全・環境教育活動と位置づけられていないということがわかる。

活動内容自体は、委員会活動として簡単にできるものであった。回収実績、成果に関しては4校とも引き継ぎがきちんと行われておらず、活動開始年からの記録はどの学校も残っていなかった（最近の実績が残っている学校はあった）。このことからキャップ回収活動は重要な位置づけでないことが分かる。

回収活動に対する教員の評価は4校とも良い活動であるという評価であった。また、保護者は4校とも積極的に関わっていた。回収活動による子どもの変化は、あまり見られないとのことであったが、一部の子どもたちは積極的に関わろうとしていた。保護者は積極的であるが、教師と子どもは意識が高くないことがわかる。

キャップ回収活動は学校において教育・学習活動として位置付けられておらず、そのため教員や学校全体の意識が低くなってしまっている。取り組むのであれば環境教育活動、国際理解教育活動と明確に位置付けて行うべきである。